

一般部門 優秀賞

小説『越前竹人形』に想う

川島 宗竹

『越前竹人形』については、先生のお書きになった小説のほか、若尾文子女史主演の映画、文学座の舞台、若州人形座の公演と原作以外に三つの脚本による作品を鑑賞しました。どの作品をとりましても、それぞれの出演者の味が出ていて感動し涙なくしては見る事ができませんでした。

特に、最後の場面は忘れられません。

崎山の子を始末するため京の人形屋「兼徳」に集金に行くといつて崎山を訪ねるものの相手にされず、伏見の中書島でひき手をしている叔母のいる向島を訪ねるも留守、中書島へ渡る舟の上では激痛が走ります。どんなに不安で罪悪感と後悔の念に苛まれたことでしょうか。

そして渡し舟の上で流産し、しかも老船頭が機転を利かし赤子を宇治川へ流してくれます。

「おっちゃん、恩にきますえ」という玉枝の言葉には、この上ない感謝の気持ちがかがえます。

安堵して玉枝は竹神部落へ帰ってくるわけですが、原作以外の三つの作品は、安堵したのも束の間、帰ってくるなり玉枝は病に伏し亡くなってしまいます。安堵した分、玉枝の死がより悲劇的に感じられ、涙を誘うと同時に、いつまでもこの悲しい物語の余韻が残ります。

しかし、先生の原作は、この後に十八、十九章と二章を充てています。なぜかこの二章に惹かれるのです。

それは、玉枝が薄幸な女性だけに、ほんの一瞬でいい、ほんとうの幸せを感じてから一生を終えてほしいと願うからです。

原作では、「泣き顔をあげて、微笑みかけてくる玉枝の顔は、みちがえるように、透明な肌を輝かせていた」というように、玉枝が美しさを取り戻します。赤

子が墮りたことによる安堵感が全身からあふれているようです。

「玉枝が帰ると喜助の家の作業場は、ひとしお活気がみなぎるかにみえた。職人たちに茶を淹（い）れてだす玉枝の容姿は、いちだんと美しくなった」「喜助にかしづく玉枝の姿は、村の若者たちに相かわらず憧れを抱かせるに充分だった。当人の玉枝も、村道で会う人々に明るく笑みかけた」。この時こそ、玉枝が人生のうちで最も輝きを放つと同時に、幸せを感じた瞬間だったのではないかと思うのです。

蝋燭もその火が尽きる瞬間、一度明るく燃えるといいますが、正にその瞬間ではないかと思うのです。

二か月後、玉枝は咯血し病に伏しますが、病床で玉枝は喜助に囁きかけます。

「あての一生のうちで、いちばん幸福な日イは、竹神イきてからの二年間どしたわ……」「せやけど、喜助はん。正直のところ、あてはな、あんたが、あての子オやもしれん、と思うことがおしたえ。死なはったお父さんとのあいだにだけた子オやもしれんと思うような日イもおしたえ。喜助はん。あてをどうぞ、お父さんの墓の傍（ねき）に埋めとくれやす」と。

玉枝と喜助は母と子になります。玉枝は、女としての幸せ以上に母としての幸せを感じると同時に、玉枝の魂は癒されたのではないかと思うのです。

また喜助は、「あんたは、わいのお母はんや。何にも遠慮はいらせん」。そして玉枝がこと切れたときには、「お母（か）ん」という言葉を投げかけます。さらに母玉枝亡き後、竹人形の製作を断ち切っただけでなく、三年後に縊死します。

玉枝に母を見つけ、母を仕事の励みとすることによって名作「越前竹人形」を生み出し、母の死を境に仕事だけでなく命をも絶ってしまう喜助に、母を欲してやまない子どもの心情が映し出されます。

このように最後の二章は、薄幸な玉枝と孤独な喜助へのレクイエムであり、読者の心をも癒してくれるのです。